青春先輩の奇行

ryo-tai

青春先輩の奇行　（一）

僕は背が小さい。

保険の教科書で読みました。
小学校のころに背が小さい子供は、成長するにしたがって飛躍的に身長が伸びるそうです。
僕のことを「チビキ」と馬鹿にするクラスメイト達。いや、当の本人たちは馬鹿にしてるつもりはなかったでしょう。
しかし、僕はとても傷つきました。いや、傷ついていません。
何故なら僕は信じていたからです。精神的にも物理的にも僕のことを下に見てくる彼らを
あと2、3年。いや、4、5年もすれば、逆に僕が見下ろす立場になることは目に見えています。
文字通りの下剋上です。

蛹が蝶になるように。シンデレラが…なんかゴージャスなシンデレラになるように。
僕の小さかった身体は180cm弱になり、（弱というところがポイントです）
全国のバスケットチームからスカウトされることでしょう。
その時、僕は、僕を馬鹿にしていた奴らにこう言ってやるのです。
「俺の名前はチビキじゃない……響だ！」
そう、声変わりを果たしたダンディーな声で言ってのけるのです。
一人称もかわってしまうのです。

そんな僕もこの春、晴れて高校生になりました。ありがとう、お父さん。ありがとう、お母さん。
こんな僕も生まれて15年と少し。立派に成長したことでしょう。だけど一つ問題があるのです。
困ったことに、あるのです。
身長が149.8cmしかありません。何故ですか？　僕にはわかりません。
あの保健の授業は何だったのでしょう。義務教育とは。人とは。生きるってなんでしょう。
149.8cmというとあれです。中学一年生の平均身長より小さいですよ。しかも女子の数値です。
高校一年生の平均身長と比べてもやっぱり小さいことは火を見るよりも明らかなのです。
ちなみに高校一年生男子の平均身長は168.4cmらしいです。羨ましい！平均って羨ましい！
149.8cmの「.8」にもイラッとします。そこで頑張られましても！？という気分です。

だけど今の僕には、おろしたての制服を着て、菜の花の匂いを運んでくる風を浴びながら、
学校までの通学路をただただ歩いて行くことしかできません。
無駄にポエミィにもなりますよ。成長期ってこういうものでしょうか。
親もまだ僕の身長が大きくなる可能性を捨て切っていないようです。
ブカブカな学ランが、ひどく重く感じられます。両親の期待も重いです。トゥーヘヴィです。

桜並木ももうすぐ終わり、これから３年通うことになるであろう我が学び舎の正門が見えてくる。
春何番かは知らないけれど、風になぞられた枝がふわりと揺れる度、
桜吹雪と言わんばかりのソレが、僕の頭と学ランの肩を桃色に染めていきました。

あぁ、高校生になったんだな。

正門を抜け、校舎までの少し長い坂道を一人歩いていきます。
突然音楽が鳴りました。僕の大好きな曲「青春キネマ」のワンフレーズです。ああそうだ。
"高校生になるんだから"　そう言って、親が買い与えてくれたi phoneを胸ポケットからとりだして、
メールを確認。なんだ、お母さんからか。

「今日から授業がんばってね！」

メールはシンプルな応援メッセージでした。
お母さん、今日はまだオリエンテーションだけなんだ。
昨日の晩ご飯の時にちゃんと言ったじゃないか。少しモヤモヤした気持ちを抱えながら
携帯をマナーモードにする。授業中に鳴らなくてよかった。そこだけは母に感謝。
ついでに時刻を確認。"すまふぉ"の大きな画面には、７時３０分と書かれていた。
朝のホームルームが始まるのは１時間１０分後。少し、いや結構早めの登校だと思う。
「なんでこんなにクソ眠たいのに、用事があるわけでもないのに
　クソ朝早くからクソ学校に行かなきゃいけないんだ。」
そんな思いが再燃してくる。目覚ましを止めるとき、歯磨きをするとき、
そして玄関を出るとき以来の感情です。学校にクソをつけたのはその場のテンションでした。

始業式を一昨日終え、まだ部活に入っていない一年坊主でこんな早朝から登校してくる奴なんて珍しい。いや、僕一人だ。まわりにも登校してる人はいたが、襟のバッジの色、
スカーフの色を確認する限り、みんな二、三年生でした。
眠たい目をこすりながらあくびをした瞬間、
僕は必死に忘れようとしていた昨日の朝の出来事を思い出してしまいました。

昨日の朝、僕は平均的な時間に目を覚まし、平均よりも少しおいしい朝食を食べ、
平均より少し小さな靴を穿き、平均的な時間に学校までついたと思います。
イヤフォンで音楽を聴きながら歩く男子生徒、
クラス替えの内容にぶつくさ文句をたれる女子生徒達、
ノーヘルメットで自転車を走らせる茶髪のフリョー。
昨日の僕は、彼らと同じ道を、同じ時間に、同じように歩いていました。

この学校では入学式の次の日から、カンユーカツドーが解禁となるそうです。
正門を抜けた校舎までの真っ直ぐな坂道では、
運動部、文化部、謎の同好会、多種多様サマザマな団体の勧誘活動が行われていました。
そうか…部活。

中学校では、推薦されて無理やりやらされた生徒会の活動が忙しくて、
部活なんてやる時間がありませんでした。でもそんな僕とは今日でおさらば。グッナイ！
やるとしたら部活は何がいいだろう。バレー部とかでしょうか？
なんかピョンピョン飛ぶのが身長をのばす秘訣だってテレビで言ってたきがしますし。

何より小さい選手でも活躍できないことはないって何かの漫画で読んだ気がします。
でも他の部活も捨てがたいです。
野球部に入って、甲子園の土を泣きながら持って帰るのもいいでしょう。
吹奏楽部に入って、みんなと心のハーモニーを大合奏するのもいいでしょう。
剣道部、囲碁将棋部、テニス部、無線部、弓道部…
うーん、選べません。選べませんとも。どの部活を選ぶかによって、
高校の思い出が全く別のものになる気がするんですもん。
そんな一生のうちの約２０分の１を左右するようなこと、僕に選ぶことなどできるでしょうか。
いやできない。

こうなればもう、先輩方がせっかく勧誘をしてくださっていることですし、
人と人の巡り合わせは、まさに運命だ！という言葉もあることですし、
一番最初に声をかけてくださった部活と運命を共にすることにします。そうします。
部活勧誘の坂道、この道で先輩たちは僕にどんな可能性を見出してくれるのでしょうか。
僕に声をかけてくれるなら、それがどんな部活だって、一生懸命やりとげる気持ちです。
こんな僕に声をかけてくれるなら。

坂道のふもとのふもと。正門から入ってすぐのところに陣取っていたバレー部の集団の前を通り過ぎようとしたときです。少しの期待と、少しの不安を抱えながら僕は歩きました。
少し声の高い二年生の男子が、声をかけてきたのです。
「バッジの色、赤だから一年生だよね？バレー部とか興味ないかな？」

口がにやけるのがとまりませんでした。
あぁ、これから３年間、僕の目は白い球を追いかけることに費やされるんだろうなぁ。
苦しい練習に涙を飲む日もあるのでしょうか。
試合の前日に緊張で眠れず、夜中に海まで自転車を走らせることもあるのでしょうか。
きっと背が小さいことが理由で生じる辛いこともいっぱいあると思います。
でも仲間たちと一緒にボールを繋げ、青春を謳歌することができる！
そんな素晴らしい部活動が僕を待っているだなんて。あぁ、楽しい学校生活の始まりだ！

「そんなチビ、入部させてどうすんだよ」

バレー興味あります！こんな僕でよろしければぜひ！よろしくおねがいします先輩！
そう言おうとした僕に、投げかけられた辛辣な言葉。
まるでオゾン層から深海まで落とされたようなそんな気分でした。

「や、冗談ですって！一応全員に声かけとこうかなって思いまして」
「冗談にしても……なぁ」
「今年こそ本気で全国目指してるのによー」
「おい、あんまりからかってやんな」

嘲る顔、笑いを押し殺す声、見下した目線。
その時の僕は突然とても気持ちが悪くなってしまい、立ちくらみのような感覚に陥りました。
恥ずかしい、悔しい、ムカツク、ちくしょう！いろんな感情が僕の胸の中で渦巻いていました。
ただ一案強い感情は、 "今すぐ消えてしまいたい" それにつきました。

誰もいない坂道を上までのぼりきり、少しあがった息をゆっくり歩きながらととのえます。
若干トラウマ的経験を終えた僕は、もう二度と部活勧誘されないために、
勧誘活動が始まる時間よりずっと前に学校にくることにしたのです。
それなのに

「おー！すっげーかわいいチビっ子がいる！」

バカっぽい声だな、そう思いました。
僕の頭のはるか上空から投げかけられる声の主。
そいつは２階の窓から僕を見下ろしていました。
無視して下駄箱へと足を運ぼうとした僕に、奴は続けてこう言ってきたのです。

「無視すんなよー！お前一年だろ！？ 俺の作った部活入れよ！ 青春部！」

これが僕、海野 響と青春先輩の初めての出会いでした。